

学校現場が求めるメンタルヘルス福祉教育

—「こころの色」授業の可能性—

作新学院大学特任教授

小田 富英

I はじめに

本稿の目的は、就労支援センターMEWの方たちが中心となって取り組んできた「メンタルヘルス福祉教育」の成果と課題を、学校現場の視点で検証することにある。と言っても、学問的あるいは、教育学的、学校論的に検証するのではなく、私が小学校教員としてMEWの方たちと出会い、授業のなかに取り込んできた経験からの検証であって、極々、個人的な視点からのものであることを最初にお断りしておきたい。

その一方で、私なりの目的もある。私は、2009年3月、それまで続けてきた研究の仕事に専念するため、36年間勤めてきた東京都の小学校教員を辞めた。しかし、昨年、ご縁があって、小学校の教員養成課程ができた作新学院大学にお世話になることになり、自然と自分の経験してきたことを客観的に見つめ直す機会を得たのである。私なりの本稿の目的は、そこで考えてきたことの提示、提案でもあり、わが国が抱えている最大の教育課題と考えている。それは、教員時代の後半に校内研究として取り組んできた「コミュニケーション能力向上」のための学校および授業の変革という視点からのものである。ひと言で言うならば、「コミュニケーション」の観点から、授業や学校行事、地域と学校との関係すべてを創り変えると言うことに尽きる。文科省は最近しきりと「言語活動」と言って、授業変革の技術的側面に押し込もうとしているが、もっとスケールが大きいことであると思う。

この『コミュニケーション』の観点から授業や学校を変える」研究のなかで、私たちが出会ったのが、MEWの方たちであった。まずは、その出会いまでの経過を簡単に述べたいと思う。

II 極私的教育史における「メンタルヘルス教育」の変遷

子供の心のなかが、理解不能となる時代、言い換えれば、従来の教育論、心理学などの分析では治まらなくなる時代がかつてあった。それは、分からなくてよいという少数派の意見をも切り捨ててきた時代であったと思う。学校が荒れ、子供をめぐる事件が頻発し、子供の自死が増加する1980年代初めのことである。学校に「スクールカウンセラーを配置せよ」との声が出始まったのもこの時代である。学校現場では、議論が噴出し、私は、「学級担任は、すでにカウンセラーなのだから、必要ない。」との持論を主張した覚えがある。今から考えれば青臭い議論であったが、「分業制」があたり前となった現在、このころから

の検証も必要に思う。

それから、十年ほどたって、私は武蔵野市立第三小学校に異動した。それまでの自由な雰囲気のある学校と違って、文部省の研究指定校を毎年引き受ける超多忙な学校であったため、研究会にも参加できないほどの生活を余儀なくされた。そんななかでも、昔ながらの学校と、地域の人たちとの暖かい関係は居心地のよいものであった。道徳、算数、国語、社会科、生活科などの研究指定校を受け、発表を繰り返しているうちに、話題が出始めていた「学校五日制」の実験校となったのである。隔週土曜日を休業日としながら、新しいカリキュラムづくりとそれに合う授業を提案しなければならなくなったのである。二年間の研究で積み上げてきたことを発表したのであるが、大きな柱のひとつが、地域の人材を巻き込んでの学校や授業の変革ということであった。私たち学校側より一歩先んじて、地域の方たちが、「人材マップ」を作成し、学校の授業や行事に参画してくれたのである。例をあげれば、学校農園。今までは、学校が畑を管理し、子供たちと授業のなかで、ヘチマ、ツルレイシ、ジャガイモなどを栽培していたのであるが、地域の農家のおばあちゃんや退職後のおじいちゃんたちが、学校農園の指導に来てくれ、収穫祭には多くの保護者の協力を得たのである。

そうした流れのなかで、その「人材マップ」に、体の不自由な方たちが参加してくれるようになり、目や耳が不自由な方たちが学校に出入りしてくれるようになった。

それまで、子供たちにとっては、白い杖を振りながら歩いていた怖いイメージのおじさんが、バリバリの企業戦士で世界中を駆け回って、病気から失明した話を聞き、歩道を歩いても恐怖感があるとの思いに共感するようになったのである。後日、私は、その方から、町を歩いていて、遠くから、「〇〇さん、自転車があるよ。」と声をかけてもらうれしかったとの話を聞き、やればやるだけ子供は変わるのだと実感したのである。今から二十年近く前のことで、「福祉教育」と言う言葉で括られていない時代のことである。

「総合的な学習の時間」が、各学校の実情と主体性に任され、その結果、「福祉教育」の範疇に入るといっただけのよき時代であったのである。

Ⅲ 「心と体の健康づくり」「コミュニケーション」から「こころの色」授業へ

その後、市内の西部に位置する第二小学校に異動することになり、隣の学区域にあるMEWの方たちと出会うことになる。第二小学校は、「体づくり」を「総合的な学習の時間」のテーマとし、授業だけでなく、朝の時間から、休み時間、放課後までを使って体力アップに取り組んでいた学校であった。その「総合的な学習の時間」のカリキュラムづくりを担当し、三年かけての結論が「心と体」は表裏一体で、生活科も含めた六年間のなかで、「心」を意識した授業を位置づけることであった。それまでは、体育の保健の授業でやってきたことを広げることから始まったのである。これもまた、「メンタルヘルス教育」と言った名がつけられる前の取り組みであった。

そうした蓄積のなかで、子供たちの実態把握を加味して新たな研究テーマが、前述の「コミュニケーション能力向上」に向けた授業変革となったのである。この当時、「コミュニケーション」を校内研究に設定する学校は多くなく、まさに白紙から始まったと言っても過言ではない。ここでも、多くの保護者の方や地域の方たちの協力を得ることができた。

劇団の演出を担当しているという保護者の方には、校内研修の第一回目として、演劇ワークショップを実技指導していただき、体をしなやかに開くことを教えられた。校内に、自由に集まり、自分の得意なことを披露するスペースを作り、子供だけでなく、保護者の方たちが「読み聞かせ」や「ミニコンサート」を開いてくれたりもした。

そうした中で、「総合的な学習の時間」のテーマを、全校あげて「共に生きる」として、カリキュラムを作り、学年の実態に応じての授業がなされたのである。今から八年前のことである。当時、六年担任であった私たちは、「共に生きる」の具体化として、子供たちが、地域の方たちと自由にふれ合い、地域生活の一員としての実感を得て卒業することをイメージした。子供たちから、地域のどんな施設や団体、人々と出会いたいかを出してもらい、担任二人で分担してお願いに上がった。幼稚園、保育園、高齢者施設、デイケアセンター、市役所関係、商店街とまでは簡単に決まったものの、何か物足りなさを感じていたところに、MEWの存在が飛び込んできたのである。学区域にできる公園をボランティアで管理する「武蔵野の森を育てる会」の方たちからも承諾を得て、70人ほどの子供たちが、10個ほどのグループに分かれて週に一度分散して活動してくるのである。担任は、二人で引率も手が回らないところを、保護者の方たちの協力を得て実施することができたのである。

MEWとは、電車の駅一駅分の距離があり、往復歩くのが問題で、なおかつ、子供たちと心に障がいをもっているとされる「当事者」の方たちとの出会いもどうなるかの不安もあったが、数回通ううちに解消されたのである。そして、また二年後の六年生にも同様の取り組みがあり、前年度までの反省を生かして、共同作業の「タペストリーづくり」が実施された。また、この時、学年全体を対象として、「こころの色」の授業も行われたのである。本研究紀要の島津屋論文「メンタルヘルスを学校素材にした福祉教育による高校生の変化」にある、「2008年9月」「市立B小学校6年生」の授業がそれである。

IV おわりに

長々とMEWとの出会いまでの歩みを書いたが、そのこと自体が、「学校現場が求めるメンタルヘルス福祉教育」であったと理解いただけたと思う。私にとっては、MEWの方々、「当事者」と呼ばれていた、あるいは呼ばれている方々との出会いは、必然の流れであり、「総合的な学習の時間」があったからでも、事例に「福祉教育」があったからでも無い。

36年間の教員生活の最後に、現代の最大の教育課題は「コミュニケーション」と実感し、口先だけでない「共生社会」を目指す登山道のひとつを見出すことができた一事例として読んでいただければ幸いである。

最後に、印象に残った話を二つ。

「タペストリーづくり」が終わったあとの子供たちの吹奏楽の発表会に駆けつけてくれた時のことである。「当事者」の方が、後ろで一本の花を握りしめドキドキしていた。いつ渡しにいけばよいのか不安だったのであろう。最後の曲が終わったとき、隣にいたMEWの方が、そっと背中を押し、その「当事者」の方は、前に進むことができた。

また、「こころの色」の授業のあと、「ぼくのおばあちゃんが、うつ病になっていて大変なんだ」とひと言。それだけでなく、こうした取り組みの後には、普段聞けない心の悩みが、さらりと出てくることにもなり、思わぬところで子供理解が深まることにもなるのである。個人面談で、うつ病になったお父さんの話が出て、「大変でしたね、お父さん。」との私に、「先生、大変なのは私の方ですよ。」と笑って答えるお母さんの言葉に、はっとした思い出もある。

「共生社会」に向かういばらの道を感じるが、理想の社会はすぐに作れるものではなく、こうした取り組みのさなかにこそあると改めて思う。これからも「コミュニケーションの観点で授業や学校を変える」との提案に加えて、「問題を抱えている子供や保護者の視点で授業や学校を変える」ことを考えていきたいと思っている。

いい機会を与えていただき感謝しております。